礫陵新聞

発行所
若松高校新聞部
北九州市若松区小石
発行　編集
若松高校新聞部
印刷所
阪本印刷所　㊞1527

行事予定

5月中旬	中間考査
6月下旬	期末考査
7月2日	クラスマッチ
7月15日	若戸大会
7月20日	終業式

就任される新執行部

空しい信任投票

昨年度後期執行部は、大きな仕事であった生徒会予算編成も、どうにか無事済ませて、小田原博さんを会長とする、本年度前期執行部に、バトンタッチされることになった。多くの問題を残して去っただけに、信任投票ではあったが彼らには大きな期待が寄せられている。

去る四月二十五日、四十五年度前期生徒会執行部が誕生した。生徒会執行部役員の構成は、左記の通りである。

会　長　二の六　小田原博
副会長　一の四　井町昌治
　　一の四　井上章治
書　記　二の一　清美智子
　　一の三　栗田祐治
会　計　二の六　大庭優子
　　一の九　安高　悟

四月十八日。生徒会役員立候補者の受け付けが始まった。しかし、立候補する者は一人もなく、選挙の日が近づいて来た。そこで、選挙管理委員会は、代議員会を通じて、各クラス二名以上の立候補者を推薦して出させるという、非常手段に出さざるを得なくなった。そうして、やっと立候補者七名を揃えることができたのである。

このようにして、四月二十四日体育館一階において、立候補者七名による立会演説会が行なわれた。会は一般生徒の無関心が多く、立候補者の演説はもちろんのこと、氏名さえ聞き取りにくい状態であった。それにまた立候補者のほとんどが、公約を並べる者もなく、ただ氏名と、「一生懸命頑張りますから、よろしくお願いします。」という簡単な言葉だけに終わらせ、会は短時間のうちに終了してしまった。

またしてもここに、例年同様、生徒の生徒会への無関心さが表われてしまった。

立会演説会が、例年通りうわべだけで終わったために、翌日の投票日は、ほとんどの生徒が、立候補者の顔と氏名が一致せず、どうでもいいという様な態度で投票が済まされたのだった。

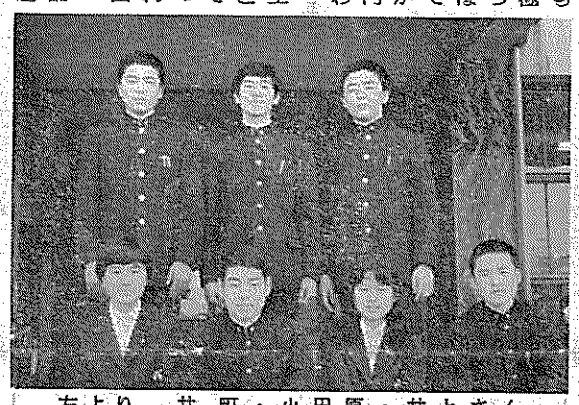
今回の生徒会役員の顔ぶれを見てみると、二年生三名、一年生四名という状態である。それで、三年生の一部から、「もう少し二年生が、積極的に生徒会活動にふつかってほしい。やはり、一年生は入学してから一ケ月足らずしかたっておらず、学校内のことは、まだ良くわからない状態である。そういった一年生に生徒会の仕事を任せるというのは、少し無理ではないか。」といった声が多分に聞かれた。それだけに、今回の会長は大変である。

それにまた、前執行部が残して行った諸問題についても考えなければならないし、自分の考えている生徒会というものも作って行かなくてはならない。それだけに、一般生徒と執行部との協力が必要になってくる。

毎度言われているが、"生徒の為の生徒会"というものを再確認し、転換期を向えようとしている生徒会を盛りたててほしい。

新執行部役員も、立会演説会の時には公約こそ並べなかったが、新しい生徒会を作って行こうとする大きな意欲が伺われる。

新執行部は、今までの生徒会から脱皮し、新しい生徒会へはばたこうとしている。



左より　井町・小田原・井上さん
　　大庭・安高・清・栗田さん

先生と生徒との協力を

生徒会会長

私達七名は、信任投票という形で、新執行部として出発しました。それだけに私達も、皆さんの本当の意志によって選ばれたとは思っていません。この信任投票がもたらした皆さんとの隔たりを克服するため、私達は、「行動」ということを、第一目標に頑張っていきたいと思っています。

もう一つ、私達が心配なのは、現在の若松高校の状態です。先月の生徒大会によってもわかるように、現在の生徒会は荒波の真っただ中におかれているのです。

先生と生徒の協力、これが現在の若高には不足しているのです。この協力なしには学校というものは成り立っていきません。皆さん、先生に対する「不満」または「不信」など、現在皆さんが思っていることを、先生方ができなかったら、私達執行部に、どしどしたたきつけて下さい。たったこれだけのことが、若高をもっと良くする方法なのです。

現在、私達執行部は他校との交流がないということを痛烈に感じています。

それは、私達執行部が戸畑中央高校に、若戸大会の話し合いに行った時でした。そこには、若松、戸畑両区七校の代表が出席していました。皆さんは、若戸大会をどう思っているかわかりませんが、どちらにしても、楽しいことだと思っているに違いありません。現に他の一、二高も、私達の意見とだいたい一致していました。しかしどうでしょう。ある高校は、若戸大会なんか無意味だとか、わずらわしいとか感じているのです。このことを聞いて、私達はショックを受けました。こんなにも学校の校風によって、意見が違ってくるのかを。この会も終り、その後の雑談の時、他の二、三校の人と話しをしたのですが、やはり、どこの高校にも生徒の協力がないということでした。

しかし、現在の若高は幸せです。なぜかというと、他の学校には、男女交際はいけないとか、ボーリングは絶対禁止とか、その他、やかましい規則がいっぱいあるのですから。

皆さん、これら幸せな環境にいることを自覚して、もっとよりよい若松高校にしていこうではありませんか。そして、私達も他校との校流を主にして、もっと勉強しやすい環境をつくることを約束します。

考えてみよう！

予算のあり方、使い方

一・二年は、それぞれ一・三年に、そして新一年生が入学してきて、校内にもまた新しい春がやってきた。年度はじめに当って、去る四月十四日に、生徒会予算承認のための生徒大会が開かれた。

例によって、会場は討会者の声が聞きとりにくいほどざわめき、限られた少数の人の意見を要約してみると、次のようであった。

「執行部は、クラブの活動状況などは知らずに、過去五・六年の予算を参考にして、草案を作成するもっとクラブ活動の実情を調査して、部費がどのように使われたのか、というような詳しい資料を、生徒全員に提供すべきだ。そういうことを知らずに、承認をするのはむりだ。」というような内容だったが、この意見は、資料をつくるには一ケ月以上もかかり、時間的にはむりだ、という執行部の意見で拒否された。そして、ここで意見がうち切られ、承認へと結果を急いだ。結局、過半数の意見で草案は承認され、今年度の予算は決定した。

ここで考えなければならないのは、生徒一人一人が、予算の重要さ、また公平な分担であるかどうかを、真剣に考えた上で承認したのだろうか、ということである。誰かが意見を述べると、賛成なのか、それともヤッているのかわからない様な拍手。そして、雑談だと言えるのだろうか。一年生にとっては、入学して初めての生徒大会であり、二・三年のクラブに属していない人達には、興味のある会とは思えなかったかも知れない。しかし、予算は我々皆のものなのだ。草案を作るのは、執行部にまかせても、それを修正し、予算を決定するのは、生徒一人一人なのだ。もっと、生徒会予算に関心を持ち、予算のあり方・使い方を考えていこう。

クラブ予算

	クラブ名	本年度	昨年度
文化部	文芸部	27,000	29,400
	生物部	21,440	20,378
	物理部	21,150	21,170
	化学部	23,090	23,346
	地理部	22,470	21,010
	歴史部	21,800	22,170
	英会話部	12,050	12,450
	演劇部	43,025	39,410
	写真部	17,680	19,900
	映画部	14,270	14,200
	音楽部	16,800	13,670
	新聞部	14,030	15,240
	茶道部	18,040	17,710
	華道部	12,000	12,000
	箏曲部	10,940	7,600
	人形劇部	34,560	32,230
	軍南部	21,000	25,600
	吹奏楽部	44,000	40,220
	放送部	14,950	10,000
	計	415,295	397,704
体育部	野球部	201,400	202,400
	庭球部	87,450	87,400
	卓球部	36,370	35,700
	ラグビー部	143,300	141,800
	籠球部	127,800	127,600
	排球部	83,250	82,675
	陸上部	89,790	94,620
	水泳部	35,870	37,230
	山岳部	34,000	33,150
	柔道部	34,000	31,675
	剣道部	118,000	118,100
	体操部	58,200	55,050
	弓道部	40,900	38,800
	ハンドボール部	99,320	98,405
	計	1,189,650	1,185,405
総計		1,604,945	1,583,109

緊張した入学式

高校生活を悔いなく

新入生のうきうきした心とはうらはらに、あいにくの小雨もようの四月九日。本校体育館一階に於いて入学式が行なわれた。

中学校を無事卒業し九年間の義務教育にピリオドを打って、夢にまで描いた高校生活を、送り始めるわけである。小中学校の時からあこがれていた、この若松高等学校に入学できたということはいくら入学時の競走率が低いとは言ってみても新入生諸君にしてみれば、その喜びは一しおであっただろう。入学式の式場に集まった新入生の顔には、高校生活への希望と不安が入り交っているようにみえた。

式の方は、定刻より少し遅れて始められたが、後は例年通り順調に進められた。そして、新入生の宣誓が行なわれた。一年一組の赤星誠君の力強い、きびきびした声が広い体育館いっぱいに響き渡り緊張した一年生の心を表わすかのようだった。

そして、式は滞りなく終了していった。

この後は、各クラスの教室に入り、担任の自己紹介や、いろいろな入学時の諸注意や説明などが行なわれた。

入学式からちょうど一ケ月。だいぶ学校にも慣れてきたところだろう。そして今、諸君らは同じスタート台に立っている。

これからの高校生活を生かすも殺すも自分の努力次第である。

就職するにせよ、大学に進学するにせよ、入学時の門の様にけっして広くはない。安易な態度で高校生活を送っては、後できっと後悔することだろう。三日後には一学期の中間考査も控えている。

「初心忘るべからず」

三年間、入学時の気持ちを忘れずに、悔いのない高校生活を送ってほしい。

何のための教育か

森田校長

新しい学期を迎えるに当って、私は皆さんとともに、次のことを考えてみたい。それは、何のために教育があるのかということです。皆さんは何のために高校に来たのか、真剣に自分に問いかけて下さい。教育基本法は憲法の精神をうけて、教育の目的を次のように定めています。「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに、健康な国民の育成を期して、行なわなければならない。」これを読むたびに、現在の私どもの教育が、深く反省させられるばかりですが、諸君自ら高校で教科を学びながら、この基本法の示すところを、絶えず考えてほしいと思います。そこには個人の利益追及のための教育、立身出世のための教育ではなく、人類の大きな理想実現のための教育が、格調高く謳われています。日常の狭い社会にとらわれて考えていると稍々もすれば、大きな理想を見失いがちです。このことは、私ども教育界にいる者は勿論、政治家も行政官も、子供の直接の責任者である父母も、深く考えていなければならないことだと思います。そして、教育を受ける皆さんも、真剣に考えていなければ、なりません。

基本法の理念は、理想社会の理念です。現実の社会が、この理想社会といかに違っているのか、ということを考えると、驚くばかりです。この現実と理想のギャップは、どこからくるのでしょうか。このことを考え、道は遠くとも、うまずたゆまず、努力していきたいものです。

若高戯評

◎若高坂皮肉話

"車の前に、飛び出すな"
風紀委員会？

礫陵言

山道を歩くと、萌え出した木々の芽に、匂うがごとき瑞々しい若葉に、自然の旺盛な生命力を感ずる。新緑の候は、学園においては新年度の始めでもある。新入生には、高校教育を受けるにあたって、その目標を見定めてもらいたい。入学式当日の校長式辞を反芻し、人格の完成を目ざし、国家社会の有為な形成者となるべく、積極的に学ぶよう心がけてほしい。幸い本校は自由の精神にあふれている。また春夏秋冬、多くの恒例の行事が催され、クラブ活動も盛んである。そのような中にあって、諸君の取り組む勉強は、単に大学受験のためのものでもなく、人間性をそこなうものでもないはずである。高校生として当然マスターしなければならないものであって、それだけに、自ら学ぶ姿勢が望まれるのである▼自習問題に端を発して行なわれた四月二十四日の生徒大会では、特に進学・就職の現実の難関を控えた三年生の切実な声が聞かれた。結局、講師の時数は、県の査定で要求時数の五十九時間が大幅にけずられ三十六時間となり三年の授業時数は週三十二時間にせざるを得なくなった。例年より一時間少なくなったわけで、三年生には気の毒だが、その一時間を自ら学び十二分に生かしてもらいたい▼環境の美化は、本校の教育目標の一つに掲げられている。にもかかわらずその効果は一向にあがっていない。仏道では掃除を重視する。私達の真如の鏡につもった塵芥をも除いたようにすがすがしくなればこれにこしたことはない。美しい環境のもとで学びたいものである▼前号まで礫陵言に健筆をふるって、学園のあり方等について御指導下さった吉開先生が、教育研修センターへ御栄転になった。先生には過去十七年間新聞部の部長として部の発展に御尽力いただいた。心からお礼を申し上げる次第である　（ま）

主張

持続性のある勉強を

なぞなぞではないが、学生にいつも影のようにくっついていて、悩ますものは何だろうか。それは数日後に控えている〝テスト〟である。今は、その最後の追い込みの時だが、試験勉強について考えてみよう。

まず、『試験勉強は必要か』ということである。平素から真面目に勉強をしていれば、テストがある時など、頭の中を整理するくらいで、改めて勉強をする必要などないのではないだろうか。しかし今の勉強方法では、絶対必要である。そこで、今の試験勉強の方法について考えてみよう。

皆は、一体何日間試験勉強をしているだろうか。それは、個人差があるが、平均すると時間割が発表される前後一約十日前一だろう。十日間で満足の行く勉強が出来るかどうか疑問である。そこで、問題になってくるのが、試験勉強の仕方である。時間が足らなければ短い時間に能率良くするか、勉強時間を何らかの方法でふやすかしなければならない。それが、山を掛けたり、一夜漬、あるいは徹夜をしたりする形となって表われてくるのだろう。だが、この方法は、目前のものには効果があるが、長い目を持って見ると、けっして自分にプラスになる方法ではないだろう。

さて、場合によって考査にない科目がある時がある。そういう場合、もちろん勉強はしないだろう。しかしこんなことで良いのだろうか。考査に出ない科目はしない。すれば、出る科目の勉強が出来ないから。出来なければ結果が悪い。つまり、勉強方法と結果が直結しているのだ。これは本人はもちろんのこと、現在の試験制度、その他にも問題があるからだろう。

参考の為に記しておくが、成績を調べる方法には次の三つがある。

試験一理解の確実性を験し、学業成績の優劣を判定すること。或は問題を出して答案を求め、或は条件を定めて実地に演じさせて、及落、採否を定めること。

考査一学校で生徒の平素の学業成績を調べること。

テスト一一般にテストは標準化されており、それによって個人の成績を客観的に評定する。

（広辞苑）

次に、重視する科目だが、これも個人差はあるが、大体英語と数学、あるいは不得意科目ということになるだろう。しかし、中には自分の得意な科目を一生懸命して点を稼ぐ人もいる。これは一概に間違った方法とは言えないが、結果よりも、まず全体のバランスを考えるべきではなかろうか。

整っている設備

絶好の自然環境の中で

去る四月五日、北九州市立玄海青年の家が開所された。ここ若松区大字竹並地は、絶好の自然環境に恵まれ、青少年の心身に、また新たな感覚を味あわせてくれるであろう。この青年の家では、共同生活という基盤の上にたって、青少年の教育にあたっている。その中で、若者達は友情を深め、創造性を養って行く。そして、若者達にとって欠くことのできない健全な心身をも、ここで養っていくのである。

昨年五月着工された、北九州市立玄海青年の家が、今年度の春、三月に竣工された。そして、四月五日に開所したばかりである。

場所は、若松区大字竹並地内。九十五万トンの水をたたえる頓田の湖水に面し、新鮮な空気と明るい太陽、緑の木々に囲まれた絶好の自然環境にある。又、脇田、岩屋の海岸にも近く、高塔山、石峰山のハイキングコースの拠点としても最適の立地条件を備えている。それに加えて、本館の白さが回りの山や木々に映えて美しい。

本館は、二百人まで収容できる鉄筋コンクリート二階建。館内は明るく、衛生的である。

部屋は数多くあるが、まず

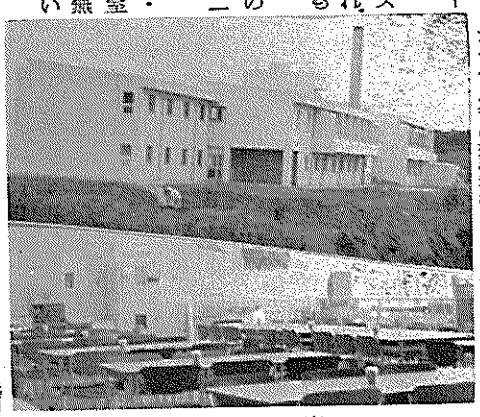
研修室　大　百四十人
〃　中　四十八人
〃　小　三十六人

ハンモックの用意があり。

和室　十五人　十二人
茶道、花道のおけいこが可能。
和室　二人　講師室
団体事務室　十人　計画の打合せ

食堂　一回につき百二十人
談話室　五十人、カラーテレビ、ステレオ等が備えてある。
体育館　二百人、バレーボール、バトミントン、フリーテニス、卓球その他室内ゲームを楽しめる。又、キャンドルサービスの用具もあり、これを囲んでのゲームもまた格別である。
宿泊室　一室に八人の寝台付小部屋が、二十部屋ある。

このほかにも、大・中・小の浴場や保健室等がある。これらを無駄なく利用してほしいものである。



遠方より望む玄海青年の家
上、下、玄関の左手にある明るく広々とした食堂

高まる人間性

利用の対象は、北九州市内に居住し、または勤務する青少年で、小学五年生より、おおむね25才までで、この年令層で、五人以上のグループで、研修しようとする人ならば、だれでも利用できるようになっている。このほかに、特別に教育委員会が認めた者や青少年教育の指導者等はこれを利用できる。

利用の方法であるが、これは直接、青年の家に電話するなり、手紙を書く等して、申し込む。そして申し込み用紙をもらって書き込むと、あとは、青年の家の方で検討してその諾否を文書で連絡してくれるのである。

利用について、注意しなければならないことは、青年の家では、毎週月曜日、国民の祝日、十二月二十九日から一月三日までが休所日となっている。したがって利用する際は、この日を含まないようにする事が必要である。

宿泊料は、市内に居住、又は通勤、通学する者であれば、無料となる。ただし、食費、一日三百五十円と、寝具のクリーニング代五十円は、個人で負担するものである。

市外になると宿泊料もいるが、これはたいへん安価で、大人一人につき二千円、小人一人につき千二円になっている。

携行品としては、筆記用具、運動靴、洗面用具、健康保険証、その他必要と思われる物を用意すると良い。

ここでの生活面は、青年の家の生活時間というのがあって、これに従い各団体で、プログラムを計画することになる。

又、次のようなきまりがある。

◎入退所は全員そろって行ない、オリエンテーションを受けること。入所後は許可なく外出しないこと。

◎他団体と交歓し、お互いに協力して研修効果を高めること。

◎施設、設備の使用は、職員の指示を得て行い、後始末を確実に励行すること。

◎服装は、研修にふさわしいものであること。上履（運動靴）を使用すること。

以上であるが、この事から、青年の家は、単なる憩いの場ではないのだということを、わかってもらえたのではないだろうか。

玄関をはいると、正面に青年の像と青年の灯が置かれている。青年の灯は、オリンピックの聖火と同じやり方のもので、太陽と共に永遠に燃え続けるのである。そして、ここで学んだ青年の心の中にも永遠と燃え続け、それが、又次の世代に伝えられていくのである。

以上述べた点からみると、少々不自由ではなかろうか等と感じる事があるかも知れない。しかし、ここは、あくまでも、未来を背負う青年の高い人間性、又健全な心身を養う場である事を忘れないでほしい。

≪ミスは続出するが≫

万国博覧会

今年の我国で最も重大でかつ、全世界の注目を浴びている日本万国博覧会は、三月十五日に開幕されて以来、現在まですでに二ケ月余りを経過しているが、現時点において、動く歩道やダイダラザウルスなどの事故、食中毒の問題など、いろいろな問題や事故が生じている。しかし、それにもかかわらず、一日平均三千万人ほどの人々が大阪の千里丘陵に足を運んでいる。ここに一つ、面白い現象が起こっている。平日よりも日曜日の方が入場者が少なく、特に日曜の夜などは〝ガラアキ〟というほどではないにしても、かなりゆっくりと見物できる事である。これに反して、月曜日などは、会場へ通じる交通機関は身動きがとれないほどに混雑し、入口についても次々と押しよせる人の波のため、交通機関に劣らぬ大混雑、このような状態は各パビリオンまでも続き、小さな国のパビリオンは十数分程度で入場できるが、国内企業や大国になると一、二時間はかかり、アメリカ、ソビエト館にいたっては五時間待ちであるという。日本民族は気短かだと以前から言われているが、五時間も待っていると随分と感心してしまう。

外国のパビリオンの中に入ると人の波におされて、まるで、自動コンベアに乗っているように、少しも止まる事なく運ばれていく。

あれだけ長時間並んで入場したパビリオンも、いざ見ると、あっけないものである。いったい何を見て来たのか、自分を疑いたくなるほどである。その点においては、国内企業のパビリオンの方が充実しているようである。その上全部とはいわないが、半数以上がスクリーンを主体にしているため前述したような混雑も比較的少なく、P・Rもよくいきとどいているせいか、外国のパビリオンよりも人気があるようである。

話しは変わるが、一日中ほとんど休む事なく歩き回っているためなのか、各広場は人でうまっている。また、会場内のあちらこちらに設けられているベンチなども、一時の疲れをいやしている人々で満たされ、中には寝ころがって一人でベンチを占領している人さえいるような状態である。また、料理が高い事にも驚かされる。外国館の料理は全く手が出ず、各広場の料理も市価の二倍位の値段で、その上セルフサービスときているため落ち着いて食べられない。

ここでは万国博の欠点を並べたようになったが、東洋で初めて開かれたこの万国博が大きな成果をあげる事を期待したい。

自己探究の場

成長過程にある我々にとって、必要なものと言えるだろう。そして、それを提供してくれるのが、クラブ活動なのだ。もちろんそれは、各クラス等でも得ることは出来るが、その機会は少ない。

宿や屋外活動の楽しみ、――喜び先輩後輩との触れ合いによって生まれる色々な悩み。合宿――例えば、活動の成果が一つの形となって現われた時の楽等々、数多くある。だがこのマイナスの要素は、心がけ次第でプラスの要素に変えることも出来るのである。

全体の過半数が入部

―新入部員数調査―

入学早々、ビラ、ポスター、オリエンテーションといった方法で部員の募集が盛んに行なわれていたのだが、現在新入部員の数は二八九人である。これは一年全員の六一％に当り、男女の比は一・一である。こうしてみると男女ともほぼ同数である。また、両クラブを比較してみると、文化部では女子が、体育部では男子が、圧倒的に多いことがわかる。入部員数の最高は二一人、最低は一人で、その差は、二十人にも及んでいる。以上のようなことは表を見てもすぐにわかることである。

さて各クラブの先輩からの意見だが、どのクラブでも「最後までやり通してもらいたい。」というような事があげられていた。体育部では「県大会に出場し、優勝したい。」というような意見も多数であったが、やはり部員が少ないという点に悩みがあるようだ。この問題を解決するにあたって、各クラブでは色々な対策を練っているようだが、一人でも多く入部することを願っている。最後に、今後の新入部員の活躍を多いに期待している！

ここで、クラブ活動の意義について考えてみよう。

興味を持ったクラブに入り、同じ目的に向かって協力していくそういう過程において経験する喜怒哀

クラブ名	男子	女子	合計
文芸部	4	5	9
生物部	0	2	2
物理部	4	3	7
化学部	0	5	5
地理部	4	6	10
歴史部	1	0	1
英会話部	5	7	12
演劇部	3	10	13
写真部	8	5	13
映画部	0	5	5
音楽部	2	11	13
新聞部	7	6	13
茶道部	0	5	5
華道部	0	8	8
箏曲部	0	10	10
人形劇部	0	10	10
美術部	2	4	6
吹奏楽部	6	4	10
放送部	4	4	8
野球部	1	／	1
庭球部	15	6	21
卓球部	11	5	16
ラグビー部	5	0	5
籠球部	3	6	9
排球部	6	3	9
陸上部	5	0	5
水泳部	4	／	4
山岳部	0	2	2
柔道部	19	0	19
剣道部	15	0	15
体操部	4	3	7
弓道部	10	4	14
ハンドボール部	0	2	2
合計	148	141	289

また、〝人間性や個性を伸ばすために良い〟とか、〝青春時代においての自分自身の能力をためすための一手段だ〟とか言われることもある。己れを見つめ、己れを知ることによって、もう一人の自分を発見することが出来、そこに、個性の発展（？）があるのではないだろうか。クラブ内での人間関係が生み出す色々な悩み。それが、人間的成長を助けるのではないだろうか。

このように。クラブ活動は我々にとって、多くのプラスの要素を持っていると言えるだろう。しかし、マイナスの要素も持っているのではないだろうか。例えば、練習の後は疲れて勉強が出来ないとか、帰りが遅くなるとか、お金が多くいる等々、数多くある。

ちょっと一言

混雑する売店

四時間目終了のベルとともに混雑する売店。パンの自由販売は禁止のはずではないかそれなのにどうしてだろうか。

そこで売店に来た生徒に質問をしてみた。

厚生委員にどうしてたのまないのですか？

―厚生委員に頼むのも、自由に買うのもいいのでは？

―厚生委員だけがする仕事ではないから

―厚生委員が活動をしてないのでしかたがない。と、このような意見が聞かれた。

このような意見から考えると、『パンの自由販売は禁止』という事を知らない生徒が多いのでは、ないだろうか。売店の方から、「以前は、きちんと厚生委員の方が注文をしてくれたが、近頃、店は混乱するし、朝からパンを買いに来るなどして風紀が乱れてきている。朝、パンを売らないと外へ買いに行くのでとてもこまる。」

と、いうような話が出た。

生徒自身が、反省するだけでなく、厚生委員は、もっと積極的な活動をしてほしい。

手芸専門の店
しらき
若松区明治町

すぐれた品をより安くご奉仕
若松
柏 丸柏
本町3丁目　TEL ㊻ 1231

欠けた新鮮味

昭和45年度オリエンテーション

昭和45年度のオリエンテーションは、4月10日のクラブ紹介、小雨の中で続行された17日の歓迎遠足と、順調に行なわれた。今回は、10日に行なわれたクラブ紹介を主にして、このクラブ紹介を一年生は、どう受け取ったのか、一年生の意見を交えながら、歓迎遠足と共に、取り上げてみた。……

例年通りのクラブ紹介　もっと魅力を!!

期待に胸はずませた新入生を迎えて、去る四月十日午前中の映画鑑賞を終えて午後からは、クラブ紹介が行なわれた。

会場になった体育館には新入生や各クラブの代表者達が集まり緊張した空気の中で、各クラブ代表の者達の演説が始まった。体育クラブ・文化クラブの順序で進行され、各クラブの代表者達は、二言三言で終る者、遅々予定時間をオーバーして、司会者から注意を受ける程に熱弁をふるう者と種々さまざまであった。

しかし、与えられた時間が少なかった為か、各クラブの特徴という物が存分に発揮できなかった様である。そのためか、初めは真面目に聞いていた新入生達も、しだいに私語が多くなり、時々出る代表者の冗談に笑う他は余り興味を示さず「全然さえないなー。」という声さえ聞かれた。

クラブ紹介というものは、とかく自分達のいい面ばかりを、知ってもらおうとする。又それが普通だが、新入生達は慣れない高校生活の中で、自分に最適なクラブを選ぼうと思案しているのだ。

しかしクラブ紹介では、いい面ばかりが表面に表われて、クラブの良しあしを判断することはできないのではないだろうか、「売りこみばかりで、全々新鮮な魅力がない、何かもっと引きつける力がほしい。」という一年生の声である。例年通りに終ったこの会、来年はもっと新鮮味を加えてはどうだろう。

又四月十七日には、小雨の中をバス三十台は、三年生から順に今回の歓迎遠足の目的地である到津に向けて出発した。森の音楽堂が集合場所となり、二・三年が拍手する中を一年生が入場という、例年通りの企画であった。

時々、厚い雲の中から顔をのぞかせる青空も、長くは続かず、傘を片手に弁当を食べる姿と相成った。昼食後の、二年有志によるバンド演奏と歌は、上手、下手はともかくとして(?)ステージと聞いている人達が一体となって、盛り上り、かなりの反響を呼んだのではないだろうか。

こうして悪天候にもめげず今回のオリエンテーションも無事終了した訳である。

イヤ　でっけいかナ　でっけいかナ？

共に頑張ろう　―新任紹介―

去る四月十日、今まで我々を御指導して下さった六名の諸先生方の退任式が、全校生徒の集まった中で行なわれた。退任されたのは

社会科担当　河野先生
〃　吉開先生
英語科担当　向井先生
〃　松本先生
国語科担当　佐谷先生
事務担当　山本先生

先生方は、それぞれ挨拶をなされた後、全校生徒の拍手に送られてこの通い慣れた若高から、それぞれの新しい職場へと去って行かれた。

六名の先生が去られた後、諸先生に代って、新しく我々を御指導して下さる新任の先生方の紹介が行なわれた。着任されたのは、

英語担当　堀上先生
〃　貝掛先生
二年古文担当　岡崎先生
地理及政経担当　西尾先生
世界史及政経担当　市来先生
事務担当　筌口先生

以上六名の先生方である。

若高に着任して一ケ月、短い期間ではあるが、ここで先生方から見られた若高生の印象、あるいはこれからの若高生に対しての要望など、先生方の挨拶も兼ねて、述べていただいた。新任の先生方と一緒に頑張ろうではないか。

堀上先生
・北九州大学
・高校生たるべき「ファイトと努力!」を忘れずに。

市来先生

岡崎先生
・同志社大学
・学生らしい若さを持って、真実の生き方を考え、実践して欲しい。

貝掛先生
・北九州大学
・身嗜みにもう少し気を配ろうてゆきたいと思っています。

筌口先生
・門司高校

西尾先生
・同志社大学
・ルールを守る好感の持てる人が多いようですが、もう少し野性味が欲しいと思います。
(先生の写真が、間にあわなかったことをおわびします)

藤瀬久美子さん
職員室で、今度新しく先生方のお手伝いをして下さる方です。
・前任校と印象が違ったためとまどっていますが、礼儀正しく清潔なので感心しています。

誠実さと貫禄

新学期が始まって間もない四月十九日我々新聞部員五名は日本史担当で、現在教頭をしておられる岩尾先生のお宅を訪問した。

門司駅から歩いて十五分位、高台にある先生のお宅は、まだ新しく、スモッグとは縁のないとても良い環境の中にあった。

岩尾先生の巻

愉快なチャイムの音と共に、奥様が笑顔で出て来られ、すぐに和服姿の先生も出て来られた。我々は応接に案内され、落ち着いたところで、早速質問を始めた。

―御出身地は―

生まれたのは大分県だが、すぐ朝鮮に渡った。

―御出身校は―

中学は新義州(現在北鮮にある)高校は京城帝大予科　大学は京城帝大　最後の一年間は九大に転校し、結局は九大を卒業した。

―先生になられた動機は―

両親も先生だったし、自分の専門を生かすことが出来るから。

―学生時代の思い出は―

冬になると、体操の時間に、スケートをしたなあ。前の晩に水をまいておくと、朝には氷が張っているので、その上で滑るんだ。中学の時は修学旅行で満州に行ったよ。それから大学の時は、友達四、五人と踊曲研究会というのを作って楽しんだ。(唄されることすべて真面目で四月一日生まれだとおっしゃっていたが、エープリル・フールとは、関係ないようだ)

―御趣味は―

―学敬される人は―

(少し考えられて)聖徳太子。古代国家を確立したし　学識の深さの面からも。

―モットーとされていることは―

誠実

―今、一番ほしいものは―

まとめたい仕事があるので、自分の時間だね。

―若高にはいつから―

昭和二十二年十月から。

―若高生をどう思われますか―

それに、礼儀を知らないね。(我々一同黙って下を向く)

―長髪をどう思われますか―

特ないが、しいて言えば旅行だな。

―好きなテレビの番組は―

特定のものはないが、七時のニュースだけは、必ず見るようにしている。新しい歌は嫌いだが、ナツメロや、軍歌は好きだね。(やっぱり)

その他は、子供中心。

―好きな物は―

日本酒。(人は見掛けによらぬもの)

―家族構成は―

太学二年の娘と、高校一年の息子がいる。四人家族だ。

―暇な時は、何をなさいますか―

テレビを見たり……。ギャンブルは嫌いだ。(近くに競輪場があるので、もしやと思って伺ったがきっぱりと言われた)

―万博について―

一度は行ってみたいね。話のたねに。

―愛読書は―

歴史方面では、美術史に関する本。文学方面では漱石。(さすがそうおっしゃるだけあって本棚には、夏目漱石の本がびっしり)

―長嘆をどう思われますか―

嫌いだね。長嘆許可の時点では何の条件もつけずに、生徒の自覚に任せていた。しかし、今は乱れがひどいね。生徒会がもっと自主的に、乱れをなくしてほしいものだ。

今度は奥様に、いくつかの質問に答えていただいた。

―奥様から御覧になった先生は―

大変無口な人ですね。でも、お酒を飲むと、陽気になりますよ。学校のことは、ほとんど話しません。

すると、先生が、「戦後派、戦中派だからね。」と付け加えられた。

―お見合ですか―

ちょっと固くなって

(微笑んで)見合です。

その時の先生の印象は―

大変ふけた感じに見えましたね。今も昔も変わらないようです。(先生が可哀想)それに、落ち着いた人だと思いました。

今度は先生に。奥様の第一印象をお聞きしたら、「覚えていないが、まあ、気に入ったから結婚したんだろう。」と笑いながらおっしゃった

―夫婦げんかなさいますか―

したことないですね。相手になってくれないですから。

二時間ほどおしゃべりした後我々は、お二人に見送られ、先生宅を後にした。

期待と不安と……

ハリキル新入生

憧れの高校生活も早一ケ月を迎え、入学前の一大苦労も何のその、嬉しさ一杯、夢一杯。

そろそろ学校にも慣れて、「あれもやろう」「これもしたい」等と希望と期待に胸をときめかせる楽しさの中に反面、不安の影がチラリ、チラリと脳裏をかすめる様な毎日を送っているだろう。何もかもが新しく、始めての事ばかりでファイトを燃やしてガムシャラに前進している一年生の諸君を見かけると本当に微笑ましい気がする。そこで、新入生にマイクを向けて聞いてみる事にした。

現在の心境は。

―何だか不安な、嬉しい方が大きいのだけど複雑な気持ち。

―何とも言えない。感無量。

―やっと入れて嬉しい。

―(首をしきりにかしげて)さあ

―ギリギリで入ったので、これからしっかりしないと……。

以前、若高をどう思っていましたか。

―(えっ)何か楽しいみたい。

―もう少しサエていると思ったね本当よ。この前のオリエンテーションの時もテレテレして歯切れが悪い(ズバズバ言ってのけた。)

―上級生が、中学校の時に比べて偉大っていう感じ

―近くにあるし、憧れも魅力もあったし、秀才ばかりいるのだと思っていたけど普通の学校だね。

若高を選んだのは。

―ウ、フフフ(マイクを向けて最初から最後まで笑い通し)

―(少し考えた後)若松には、県立高校が二つしかないし、商業には向きそうもなかったので。

―一応、大学に行くつもりで、若松の唯一の普通高校ではあるし。

―家が近くだし、兄が若高を出ていい学校に合格したから。

クラブは、どの様にして知り、選びましたか。

―兄姉に聞いて。

―スポーツがやりたくて運動部を

―知人に強引に誘われて、半ば、仕方なし。

―クラブ訪問をして生徒会選挙に立候補してみようと思いますか。

―全然その気がない。

―今は自分の事で精一杯。

―その勇気がないワ。

高校生活をどの様に過していきたいですか、目標は

―まあ、普通に三十五点以下を取らない程度に。

―スポーツと勉強を両立させて有意義なものにしたい。精一杯悔いのない様にするつもりだ。

―自分を大切にして勉強なりクラブなりに頑張って行きたい。

―漠然としていて、三年間楽しめたらいいナと思っている。

―何となく楽しい雰囲気に包まれているので考えていない。……等であった。

全体を通じて、目が浅いためか中学生気分が抜けきらないと思われる面が多分にあった。それでも男子の二、三名の人には、しっかりとした決意が伺われた。月日のたつのは早いもの。一日一日を大切に過ごしてほしい。

「幸に遠く永と共に」

春たけなわ、続々とラホラ。期待を裏切られた女性フアンも多いのではと思われる。

先生のお話によると奥様の性格や細かい事は、まだはっきりとはわからないそうである。又、自分では孚主関白のつもりだが、いずれはそうなりたいと言われていた。

それに、最も嬉しい事に、大好きなお酒は、公認してもらっているとか。とにかく、お二人の永遠の幸せを心よりお祈りして、おめでとうございます。

DPEカラープリント撮影
ダイワ写真工芸
若松区上原町(若松高校前)
TEL (77) 3173

舶来化粧雑貨　何でも揃って新切な
みだしなみの店
きねや
若松区本町三丁目五番三号
TEL(77)2651~2

龍そば
本町銀座　TEL ㊼ 4320　TEL ㊼ 4047

進路に再認識を

またも浪人有勢

現在の社会では、大学問題が大きな範囲を占めるようになってきた。

そして、入試までもが、ものものしい警戒の中で、始まった学校も少なくないであろう。

しかし、本年も去年に続く不振の年であった。

特に私立大学などでは、現役よりも浪人者の方が有理だったそうである。

今年の本校における大学合格者は、新卒一三六名、旧卒一三四名と大幅に浪人者が数をしめている。最近では一浪のことを「ひとなみ」と読むそうである。

また今年の傾向としては、特定校集中から、全国的に分散している。これは各自がそれぞれ自分にあった大学を選択し、いわいる「猫もしゃくしも……」から脱皮したのではないだろうか。

又理系への進学が年々ふえている。これは「良い職につくため」のものだろうか。

大学とは、そんなにも社会からの必然的要請をつけているものだろうか。

ここでその一例をあげてみよう。

国立一期	現役(浪人)	昨年
東京大	二(一)	〇
京都大	一(一)	五
大阪大	一(一)	二
九州大	六(九)	一〇
長崎大	二(六)	五
熊本大	〇(八)	六
宮崎大	〇(五)	三
国立二期		
山口大	一(一)	七
九州工大	五(三)	八
福岡教育大	二(〇)	一〇
公立大学		
北九大	六(七)	一三
福岡女子大	一(〇)	二
私立大学		
福岡大	二三(三四)	四一
八幡大	一(一)	一〇
西南学院大	二(一五)	三五
中央大	一(一)	五
同志社大		
立命館大	六(八)	二
明治大	二(一九)	一三
九州産業大	一(一)	二
早稲田大	二(九)	六
公立短大		
尾道短大	三	三
山口県立女短	二	〇
長崎県立女短	二(一)	二
福岡県立社会保育短大	〇(一)	二
私立短大		
西南女短大	一一	一〇
梅光短大	三(一)	五
東筑紫短大	二	三
折尾女縫短大	一	三

などである。

資料不足などではっきりしない面が多分にあるが、一応わかっていただけたと思う。

入試に直接関係のある三年生だけでなく、一・二年生もこれを機会になんのための大学か、じっくり考えてみる必要があるのではないだろうか。

事務に集中

求人難のおりから、いわいる青田刈りが今年もなされた。

早い人は、四月中旬にすでに試験を行なっている。

また半数の者は夏休み前には、試験をすませている。

これでは、落ちついて勉強ができるはずがない。

今年度は、そういうことのないように、求人を職業安定所を通じて、五月一日以後に、試験を七月二十二日以後にとしている。

来年度からは、試験は十一月頃からになるそうだ。

また面接重視やかなりの作文力を要するものも、めだったそうだ。また一、二年の学校の成績も重視されるそうである。

運動部に入っている人などは、有利だそうだ。

今年の就職者は百二人で、その主な例をあげると次のようになる。八幡製鉄5、福岡銀行4、日本水産4、東海電極4、貴船商事4、安川電気3、段谷産業3、城水鉄工所3、相田製作所3、三菱銀行2、西日本相互銀行2、旭硝子2、鶴丸海運2、触媒化成2、東海鋼業2、若松車輌2、日本食堂2、日商岩井2、阪本歯科2、などだ。

求人の条件としては、明朗そして協調性に富むことだそうである。

今年の傾向としては、事務関係が多く、特に銀行関係は全体の五分の一にも及ぶ。

進学者よりも一歩早く社会へでる就職者、それゆえに苦労もなみたいていではないと思う。

それを乗りこえてこそ本当の社会人といえよう。

進学する者も、就職する者もしっかりした信念を持って、うち進もうではないか。

——図書館だより——

読書で青春の糧を

今月の新刊から興味深い図書を紹介しましょう。

○ファン・ゴッホ書簡全集（全六巻）みすず書房発行

"この書はフィンセントとテオへの思い出にささげられる（二人は生ではなく死ぬるも離れざりき）サムエル後書一・二三"どの巻もこの言葉がまず目に入ります。刊行者のはしがきにも"…それらはこの画家にとって、また、孤独な苦闘のなかで自分が見たもの、感じたものを表現しようとしたフィンセントを忍耐と愛情と理解とをもって支援した弟テオにとって、生きた記念碑となるものである。もっと広い意味で、…"とある。また、ゴッホがテオ宛へ送った書簡中にはデッサン画が随所に挿入してあります。これは、いまゴッホが描こうとしているまた描いているものをデッサンして、それについてのゴッホの考えを書いてテオに知らせている。これを読むとゴッホが何を考え、何を言おうとして数々の名作を描いたのかわかり大変興味深い。それを一つ一つ見て行くのも大変楽しい書物です。"ひとりの偉大な知性の男、強力な個性の男、温い愛情に満ちた人間のなかに引きずりこんでしまいます"

○名著複刻全集近代文学館（全三十九巻）

皆さんが一度は読まれた事のある明治期の名著の初版本重版です。表紙の装幀や活字はもちろんのこと、紙質の手触までが初版本とほとんど同じというものです。草書文語体で書かれた"みだれ髪"数枚の和紙を綴じてある"当生書生気質"等、多種多様な楽しい書物です。展示書架に入れていますが、御覧になりたい方は、カウンターの係迄申し出て下さい。

新着図書の案内は今まで通りプリントにして毎月一回行ないます。

さて、若高生の若高図書館での図書の利用度は、分類別ではやはり文学書が多く、次に自然科学となっています。文学を別けてみると、なんといっても名著が多く読まれていて、作家では、漱石・芥川・太宰やゲーテ・ジイド・トルストイ等々の作品が読まれています。文庫本は外国文学、特に、推理小説が多い。映画された作品をもう一度読もうと借りる人もいる。シェークスピアや山本周五郎の作品がそうです。自然科学では、主に数学・生物・物理・化学の参考書を借りる者が多く、その他のものは、専門的になってくるため余り借りていない。

それから歴史書・哲学やスポーツ関係と続いてます。利用度の少ないものとして総記があげられます。

"お知らせ"

閲覧室に入って右側の黒板を承知していると思いますが、いままでは図書館の方で、時や文章の一節を抜書きしていたのですが、今学期からは生徒の皆さんから閲覧室の黒板に戦せる戦句を募集していますので、載せたい人は図書館の方まで申し出てください。自作の詩でも結構です。

最後に皆さんのこれから生きていく人生の指針に、成長の糧とするために、多くの図書を読んでいってください。

プールは九コース

設備増大

春休みに、はいってから取りこわし始めた武道場も、今はその残骸が少し残っているだけとなった。

そこで生徒に感心のある設備建設の事を調べてみた。

プール、これは体育館の北側にできるもので、総工費1510万円。広さは、25メートル、9コースだそうだ。

今年冬までには完※成し、来年夏から使用できるそうだ。3年生は使用できぬまま卒業である。

自転車置場、これは保健室と南の昇降口の間あたりに作られるそうである。

裏門、体育館とテニスコートの間にあり、もうすぐ完成の予定である。

その他、体育館裏のブラスバンドが練習に使用していた家も取りこわされ、食堂の予定地になるそうであるが実現には、まだほど遠いようである。

しかし、生徒が期待している旧武道場後には、なにもできないそうである。

また、旧女子更衣室は、生徒会執行部及び、映画、英会話、新聞の各クラブ部室が、所せましと肩を並べている。なお旧男子更衣室は、夏になると更衣室になるそうである。

今あいている旧2年7組の教室は何にも使用されないままである。

部室が足りないのに、空室ができる。この現状に、諸君は不満をおぼえないのだろうか。

若松に来た鷗外

随筆

～～山田輝彦先生～～

樋口一葉のことを「オケゲチイッパ」と続んだ者がいるそうだ。明治は遠くなったから、そんなこともありうるだろう。しかし、森鷗外という名を知らぬものはあるまい。彼の知識の広さや活動の分野の広大さを、弟子の一人は「テェベス百門の大都」といった。百の城門を持った大都のごとく、どこから入ったらその実体がきわめられるか分からないという讃嘆の言葉である。彼の作品の「舞姫」や歴史小説はよく現国の教科書にのっているから、高校三年の間には半ば強制的によまされるということになる。鷗外という号の由来は墨田川の鷗の渡しの外(ほとり)という所から来ている由。この鷗外が明治三十二年、今から七〇年程前に第十二師団の軍医部長として小倉にやって来た。陸軍の中枢部から疎外されて、彼は約三年の間、挫折を知らなかった心に痛切な挫折感を味わって過した。これが鷗外の人間的な成長に大きなプラスになったことは、人々のいう通りである。その鷗外がたった一度だけ若松に来たことがある。正確には二島に来たのだ。明治三十三年十月四日、鷗外三十九歳の時の日記に、「衛生隊演習に出発。黒崎、直方、赤間、芦屋、二島」とある。この地名の順序からいうと、渡し場を渡って来たのではあるまい。折尾の方から廻って来たことになる。とにかく来たことは事実である。

いささか品の悪い言葉で、女子の諸君からは叱られそうだが、大いそぎでアメリカの視察旅行をするのを「アメション」というそうだ。アメリカで小便をして来ただけということだろう。そうすると鷗外の演習途中の二島寄りなどさしずめ「ワカション」とでもいうべきだろうか。鷗外は最初の妻を結婚後一年で離別し、以後ずっと独身だったが小倉勤務の最後の年に「美術品のような妻」をめとり、明治三十五年の春三月、東京第一師団軍医部長となって、よろこんで小倉を去って行った。

◈編集後記◈

諸行無常！ちょうどこの言葉の感じがぴったりのように、我新聞部も先輩から後輩へとペンが渡され、今回は二年生中心で新聞を作成した。二年の部員は総て女子、新聞も女子色強いものになったのではないかと心配しているが、いかが？

春休み中には、住み慣れた部室も姿を消し、現在は、旧女子の更衣室を部室として利用しているが我々は、なんとなく落ちつかないままで活動している状態だ。

さて、新入生諸君。それぞれ夢を抱いて若高に入ってきたと思うが、高校生活はこれからだ。先輩と共にがんばろう。

※礫陵新聞一二号に対する意見・感想etc.がありましたら新聞部室までどうぞ。

他校訪問

新校舎へあと1年

——八幡高校の巻——

四月二十五日。土曜日　曇天

我々新聞部員一年生四名、二年生二名は、創立五十年という歴史の跡を見ることのできる県立八幡高等学校を訪ねた。

校舎（写真）は、八幡中学時代の"質実剛健"という校訓にふさわしくどっしりとした構えであった。しかし、この歴史の跡も横断道路建築用地のため来年の四月までで取りこわされるそうだ。ちょっと惜しいような気さえする。新校舎の移転先は、槻田丘という所で、現在建築中であるとのこと。あと一年ということも手伝ってか校内美化への関心は薄いそうだ。

全校生徒二四〇〇人。我校とほぼ同数である。男女の比は二対一、女子は両手に花ならぬ。両手に鳳(?)である。

クラス編成は、各学年十クラス。男女クラスはないそうだが、はたして男女交際が活発なのはなぜだろうか。毎月熟行部主催のフォークダンスや、みんなで歌おうなどが行なわれるそうだが、そのためであろうか。

体育・文化クラブ合わせて二十五科、国立文化・私立、短大・各種学校と就職の四つのコースに分かれているが、クラス編成の際には関係なく、物理・数学・英語の三教科のみ教室移動によって授業が行なわれる。この学校では、コースの等別問題は聞かれないらしいが、教室移動の不便さと、分散授業のためクラスの和が出来にくいという二点でこの方法も余り人気がないそうである。

先生との交流は進学校のためか余りない、と言っていた。今年から実施される家庭訪問はおそらく初めての試みで、その成果が期待されているそうだ。

次に風紀上の問題としての髪型だが、今まで規制がなかったのが男子はおかしくない程度の長さ、女子は襟までということになったそうだ。また今年度から女子の外出時の私服が許可されたそうである。

遅刻は勉強疲れのため(?)多いとのこと。盗難はスリッパが多いそうだ。遅刻・盗難の問題等は何処も同じということである。

八幡高校は、我校と校風などの点で共通性があり、話がはずんだが、この辺で、小雨のぱらつく夕暮れの大磯谷の八幡高校をあとにして帰途へと足を早めた。

ムルームとの結びつきは余りないそうである。

我校で現在問題となっている事をいくつか質問してみた。

先日の生徒大会で問題の一つとなったコース分けについては、国立理

本格派テクニックの店
アサヒラボ
本町三丁目

新刊　雑誌
辞書　参考書
石松書店
本町銀座　TEL ㊻ 2415

メガネとコンタクトレンズ
各眼科御指定
アイチ眼鏡店
本町三丁目8—24　TEL㊻3312